

福岡

福祉活動専門員の

ま な こ

社協活動前進のために

No.23 1986年3月発行 福岡県専門員連絡会 まなこ編集委員会 印刷 ヒガシ印刷社

それでも地域で生きたい

「自立」への思い

「脳性マヒといっても一人一人違います。私は、歩くことも、立つこともできません。手もかなわないし、言葉も不自由です。

話をするの何十倍もエネルギーがいります。なにをするにも力がいらいます。頭では物をつかもうと思っても

思うように手や足は動いてくれません。私はしんどくてたまらないのです。

こんな重度の私がなぜ「自立生活」に入ったかというところ。私は家に32年、施設に11年いました。

施設にいても何もかもしてもらって楽じゃないかと思われるかも知れませんが、施設では、何もかも時間が決められているしですね。例えば、起床、食事、入浴、就寝と決められた生活の中でしか暮らしていけないのです。そして、何もかもが与えられる立場になっていて、自分でこうしようと思っても制限があるのです。それに、社会の中でもそうですが、子ども扱いにされます。四十歳すぎの私に「ーちゃん」とか、「ー君」とか

言われます。ですからこれは、私に対する差別じゃないかと思つたのです。屈辱的にさえ思えたのです。

施設では、出入りが多すぎると困るといったこともあり、どうしても責任上、閉鎖的になってしまうのです。

私は、このままでは終りたくない。もっと人間らしい自由な生き方をしたい、地域で暮らす中で私のありのままの姿を見て

もらい、みんなの意識を少しでも変えていけたらと思いました。親兄弟に面倒みてもらえばと考える人もいるかも知れませんが、親は次第に歳ととってくると、兄弟は結婚したり、子どもができたりますと、どんなに兄弟でも負担に感じる時がかならずあると思うのです。私の方もその負担が重荷になってくるのです。

そんな理由で、私は地域で「自立」したいのです。」

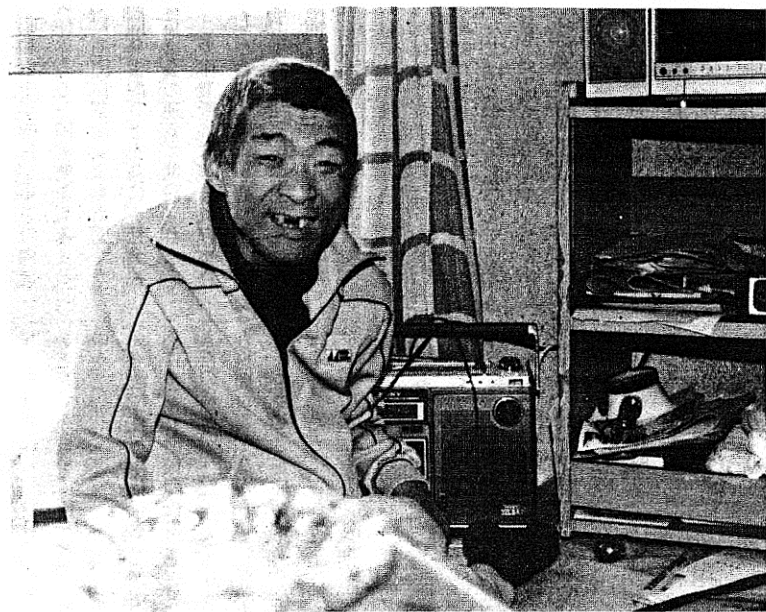
今年2月1日から、筑後市で「自立生活」を始めた阿志賀俊範さん(44歳)は、このように「自立」への思いを語ってくれました。

自らの「障害」のために、社会的にアブノーマル(異常)な生活を強いられている障害者。その中の一人の重度者が、ノーマル(普通)を求めて飛び込んだ。

飛び込まれた社会には、まだ何も用意されていない。社会制度、地域環境、そして市民の意識……。

ただ、今は一にぎりの彼の「自立生活」に共感した者たちの集まりがあるのみ。

(中山記)



一箱のチョコレート

作業所設置反対運動から学んだこと

須恵町 田ノ口 利 治

昭和六十年四月、須恵町内に居住する心身障害児を対象として、通園作業所「よもぎ園」が

共同募金配分金を基に、社会福祉協議会の運営で開設された。

この作業所は、義務教育を終了した心身に障害を持つ子供達に、生活訓練や作業訓練、教課訓練等を行う事により、親の願望でもある「一日も早い社会への自立」を援助する為に設置されたものである。

町の厚意により、約九百四十坪の広い土地を無償で借り受け工事にとりかかったが、ご多分にもれず、地元住民の反対により工事を一時中断した。

いつものパターンどおり、総論賛成各論反対である。

地元民の理解を求めるために数回説明に出かけたが、説明会のはずの会合が、毎回、反対集会に変わってしまうのである。

「作業所で地鶏を飼育されると羽毛が飛び団地全員が喘息になる、動物の飼育は一匹たりとまかりならぬ」又、口にこそ出さないが「団地内の道を障害児に通られては困る」といわんばかりの口調で、口角泡を飛ばす住民もいれば、延々二時間半の反対電話を事務局にかけて来た住民もいた。

このときほど「自分は社協マンとして今日まで何をしてきたのか？」

今まで住民の福祉意識高揚のために色々な活動や行事を催してきたのは何のためだったのか？と自問自答しながら、己の無力さとむなしさを痛切に感じた事はなかったが「ここで予定地を変更すればこれが前例となり、変更先でも反対されるのは明らかであり、なにがなんでも理解してもらおう以外に方法はない」との判断から、役員と事務局が一丸となり、努力した甲斐あって、約二年の時間を費し、やっと開園されたものである。

指導員も教職をなげうって子供達の為に就任してくれた。

現在、H君、K君、K子ちゃん、の三名が通園し、陶芸、鶏飼育、農園、椎茸栽培等に汗を流し、将来の社会への自立に向けて働く喜びをかみしめている。子供達の姿を見るにつけ、開園に致るまでの苦勞が回顧され、喜びがこみ上げてくる。

開園三ヶ月後の七月には、この子供達を理解し、地域の中の施設としてとらえていただく為に「よもぎ園祭り」を開催し、多くの人達の参加と援助をいただき、今日では近隣住民の人達

も理解を示し、援助の手がさしのべられるようになったのは、実にうれしいことである。

二月十四日の事である。通園児三人の中で、一番体の弱いK子ちゃんが、朝の登園途中に母親と共に事務局に訪れた。

「おじちゃん達にすばらしいものをあげるから必ず食べさせてね」と、パレンタインチョコレートをプレゼントしてくれた。

お母さんの話によると、十四日に渡すんだと言って早くから包装やリボンかけに家族全員に手伝わせて準備していたそうである。

心身障害と強度の弱視のためにたどたどしい歩きしかできないK子ちゃんが、満面笑みをうかべて一人一人に箱入りのチョコレートを手渡ししている姿は純真そのものであり、熱いものがこみあげてくる思いだった。

この子供達のような純真な心を全ての住民が持つてくれたらどんなにすばらしく、どんなに楽しく、平等で住み良い町になる事だろう、と思ったとたんに、ふと我にかえり「その責務は我々社協マンにあるんだ」と肝に命じた今年のパレンタインデーであった。

共同作業所とは

「障害はあつても、みんなといつしよに働きたい」、「人間らしい生きがいある生活がしたい」と、どんな重度の障害者もこんな願いをもっています。

しかし、現実には、障害者の働く場は、産業社会の中ではなかなか保障されていません。

こうした状況の中で「共同作業所」がつくり出されました。障害にあつたとりくみを通して、障害を軽減したり、労働への参加を可能にしたり、人間らしい発達を促すといった成果をあげているのが「共同作業所」と言えます。

さらに、ここに通う仲間（障害を持つ）たちが、本当に人間らしく安心して生きていくためには、彼らが親や関係者だけでなく、地域の人々に理解され、支えられなくては、達成されるものではありません。

彼らの今おかれている現状を知り、そして彼らの願いに耳を傾け、だれもが、障害のあるなしに関係なく、安心してくらせるまち（地域）づくりのために、理解を深めてもらいたいものです。

共同作業所

わが町の場合

福岡町 志水秀則

人間として生きて行くための権利と発達の保障を目指して、

それぞれの地域に作られた共同作業所は、障害者自身やその親たちが中心となって行政や社協に請願・陳情をくり返し、やっ

との想いで出来るケースがほとんどであるが、福岡町の場合その過程が他の作業所とは若干異なり、いまだにぎこちなくまとまりがないのである。

そもそも宗像郡には以前から「あゆみの会」という障害児者と親の会があり、就学後の年令に達した人たちは青年学級という学習の場を月に一度各人の家を持ち回りで開きながら学生班（福岡教育大学の学生ボランティア）が学習や作業の指導を行ってきた。

しかし、各自の家を順番で回ることの不便さや親の悩みや問題をゆつくりと話しあう場所がないこととして、会員の四分の三を福岡町が占めていることから福岡町に対して会員の集

まれる場所を提供してほしいとの要望があり、社協と協議の結果、福岡町の社会福祉センターの一室に「福祉の部屋」「福岡サントラス」が比較的すんなりと誕生した。

そして、その部屋に青年学級も同居して週に一度の作業日を入れて共同作業所としてうぶ声をあげ、以前から取り組んでいる洗たくばさみ作りを始め、補助金もいただけるようになった。

つまり福岡サントラスは純粹の共同作業所としてスタートしたのではなく、親の集会所と作業所としての両方の機能を満たさなければならぬために相方が納得のいくような部屋の利用方法がみつからず今日に致っている。

私は当初、親の会が中心となつて作業所の発展のために積極的な協力を得られるものと期待していたが、一部の有志を除いては我が子の療育や将来のことですきいばいな会員に大きな期

待をかけるのは無理と悟り、今は改めた態勢で作業所を新設する方向で検討中であるが、補助金の使い方や指導員の雇用以外にも問題は多い。

一般的に親の会が中心となつて作業所を運営するのは困難な面が多いとされているが、それにしても福岡町の場合は作業所が変則的な育ち方をしたこと、会員のほとんどがよそのような活発な作業所を地元で作り、将来、自分の子どもを通わせたいなどという気持ちをもつていないというところに伸び悩みの大きな原因があるようだ。

私は最初からよそに目を向けつばなしで我が子にあった施設を必死に捜している親を見てみると、気持ちは充分わかるのだがそのやる気をもう少し地元に向けて燃やしてほしい気がしてならないし、指導力のない自分の非力さを痛感させられ、相も変わらず落ち込みの毎日である。

新装なった我が町自慢の福祉の館、「住民センター」で十一月二十九日、重度身障施設菊池園々生を初めて招待し、「三輪町身体障害者の集い」を開催した。

目的はふれあいの広場づくり。

参加した人は、園生五十人、同園職員三十人。地域身障会員、社協役員、町当局、町内施設の出

演者、ボランティア、婦人会幹部総勢二〇〇人。

朝、菊池園のバス三台が到着。待ち受けた一同、早速車椅子を押し二階会場へ。スロープを渡って車椅子が二階大ホールへ上るのも初めてだが、押す人も初めての経験だ。

庭園の石屏風には

萎えし手と知れば

なお来る 秋の蠅

など俳句数句を白すみで列書し、センターの壁には園生の詩、油絵、短歌、刺繍などを掛け、館内は障害者の作品展で埋まっ

喜ばれた 身体障害者の集い

三輪町 北原 暁

た。当日の「文化的催しもの」の白眉は、重度障害にめげず、手指の間にはさんだ本の棒でけん盤をたたき、足の指で弾き、腕にテープで固定したハーモニカを吹く人々の懸命な姿だ。会場から万雷の拍手が沸く。

これをバックアップして、町内の他施設から友情出演があり、さらに社協役員、婦人会から仕舞、日舞、歌謡曲の競、熱演で触れあいのふいんきはいっけに盛り上った。

ベッドに仰向けの園生も喜びのあまり奇声をあげ周囲を驚かせた。五時間に及ぶ「集い」は終わった。晴れ晴れとして満足げな顔で帰りのバスに乗りこむ園生たち。

障害者に対する一般の理解度は自分が思っていたより相当進んでおり、各団体の協力を得、予算面の心配もなかった。

やればできる。社協事務局二人の小勢力ながら、一同「よかつたなあ」と秋晴れのような気分を味わったものである。

まなこ編集委員のFさんに「原稿お願いしまーす」と言われ、「今度は何か書きましよう」と安易に返事をし、あとで「しまった」と思ったのですが約束は守らねばとない頭で、まなこの前、前、前号をめぐって何を書いたら良いか考えてみたのですが、これと言って良い案は浮かびません。で、女性であることに甘えてこのごろうれしかったことを2、3お伝えしようと思います。

実は、昨年直方の心身障害児者小規模通園事業の資金づくりにと始まった。牛乳パック回収運動に色々な目的があつて便乗させていただけですが、そのうちの一つである地域住民の福祉に対する関心度と啓発については、思ったより反響があつて、集まることをほとんど期待していなかつたのに、(すみません)

社協に今までまったく関係なかつた人から、それも、何かに役立つだろうと三年前から集めておいたなど直方に渡すのが惜しいくらいにきれいに束ねて持参されたり、子供たちが箱いっぱいかかえてもつてきたり民生委員会のたびにとつと増えたりで、牛乳パックが来るたび

に胸がジーンと熱くなつていきます。

それから、昨年からは始めた老人給食サービスは民生委員手作りの弁当に、お年寄りからお礼の電話や手紙が来て、電話の向うの涙声について私も泣いてしまふという喜び。それと同時にこの給食サービスをすることで色々な心づかいを民生委員に教え

喜ばれます
給食サービス
桂川町 仲光志賀子

られ感謝と感激の毎日です。

また先日は、世更の修学資金を貸付けしていた人から「無事就職したので何かに役立てて下さい」と現金封筒が送られてきました。償還さえおぼつかない人もいる昨今こんな人もいるのだとうれしくなつてしまいました。

今までは人の心の冷たさや、無関心さばかりが感じられてい

たのですが、昨年からの色々な事業を通しての反応に住民が持っている思いやりの心や助け合いの心の可能性を見出ししています。これらの人たちの心をどう広げていくか、これが、これからの私の課題だと思つています。

まなこの原稿にしては「ちょっと」と思いましたが息抜きに読んでもらえば幸いです。これからもどうぞよろしく。

老人からの便り

あけましておめでとようござい
ます。

みな様方のお清福をお祈り申
しあげます。今年もどうぞよろ
しくお願い申し上げます。

一人暮らしの老人にお弁当配
給される。今日は嬉しい日だ。

昼食のお弁当が来る日だ。ああ
ー幸せだなあーと思つた。いい
年と私は生水合わせた者だと長
生きして良かったなあーと嬉し
く感謝する。桂川町社会福祉協

議会内の係の皆々様方と深く心
より厚く御礼申し上げますと存
じます。続いて民生委員の方々
にも私達老人は喜んでいきますと
申し上げます。

良いお年を。

独居のお年寄りに接して

—独居老人ふれあい交流会—

宮田町 今田 要

老人問題は今や社会の問題として環境、医療、就労、経済等その対応が迫られている。

とくに独居でも高令の老人問題は切実な生活実態となつている。

本町では老人福祉の一環として、独居老人ふれあい交流会」と称し、民生委員ボランティアの協力を得て開催している。

(二回目)
参加希望一三〇名、二日に分けて行った。

当日は、あいさつの後レクにくわしいボランティアによりおとしより向きの歌のレッスンや歌に合わせた軽い運動をする。おとしよりは意外なほど元気でハツラツとして体を動かす。

このあと第一回にはなかつた「分科会」?を開催、六、七人づつの小グループにわけテーマについて話し合いをする。

テーマは「今一番困っていること」「困ったときは誰に相談するか」等、直接日常生活にかか

わるものとした。おとしよりのちは始めてのシステムしかも町内各地から来た始めて見るお互いの顔にとまどいがあつたが次第にうちとけはじめた。ここでも雄弁家が目立ち遠慮がちなおとしよりは終始黙っていた。

お互いが高令で独居であり日常あまり他人と口をきかない環境にあるので発言があるかと危ぶんだが時間がたつにつれて話声が重なりとくにおばあちゃんの声はオクターブも上つてこちらの心配は一べんにとんだ感がある。

こんごもこの催しを継続しいよいよたくましく活力のある顔を毎年拝見したいものである。

総括

- 一、意外にたくましい面がある。
- 二、次回から自主的運営も考えられる。
- 三、近隣地域の相互訪問を促進する。

ふれあいの中で本当のニーズを

北野町 吉塚 芳子

在宅福祉、ボランティアに力を入れる我が社協であるが、何かをしようかと事業推進に先行して、果たして、本当に老人や障害者のニーズに答えているだろうか？

病気を知らない人とは、話したくない。ましてや、一緒に暮らしたくない。なぜなら、その人は、優しくないからだ。”とある病床にいる女性が言ったそうだ。全くその通りである。

健康すぎる人は、病を持った人の本当の気持ち判っているだろうか。「痛いと言っても我慢していれば治る」「がんばってね」と、口先だけで、本当に思っていることができていないのではないか。だが、人間には、幸いにして、想像力がある。人は、す

ドが人間の欲望をかなえる時代になってきたという。果たして、これでいいのだろうか？と、私の頭の中はいろんなことでいっぱいになった。

べてのことを体験することはできない。体験できない分は、想像力で補っていくしかないのだ。この人間のもつ言葉と想像力をうまく活用し、老人や障害者をうまく活用し、老人や障害者を築き、本当のニーズに答えていかななくてはならない。

彼らが口にして言わなくても、そのふれあいの中で、自ずと把握できるのではないかと。まずは、接してみることに、話してみることに、触れてみることに、そして感じることから、本当のニーズを把握し事業に生かすべきである。世はプラスチックマネー時代、という言葉が耳にした。今の世の中、金融機関、電話、買い物など、一枚のプラスチックカー

このカード、契約書に名前を書き押印して、確認の電話が入り、すべて完了。こんなに簡単にすまされるんだもの。便利のひとことにすぎない。でも、この便利さにまかせて人と接したり、話す機会が少なくなり、ある寂しさを感じざるを得ない。

それが業務的にもう二度と会う機会がない人であるにしても、何となく寂しい気がするのだ。何はともあれ、プラスチックカードのような魔物にのりこまれないようにするとともに、初心にかえり、新たな時代における社協のあり方と社会背景に洞察の眼を注ぎ、今後あたたかいふれあいを大切に、仕事に、余暇に、そして我が人生に精進していきたいものである。

印象に残った おばあちゃん

北野町 野瀬 光治

六十年、第一回独居老人の集いとして会食会を実施した。

当初、社協で計画していた会食会は婦人会ボランティアの方々に料理をして頂き、町働く婦人の家に老人を招き、老人同士のふれあいの場を設け、食事をすることであった。しかし、日程的にボランティアとの話しが拗れ結局特別養護老人ホーム「宝生園」に於いて十月二十九日実施する運びとなった。

当日は、町老人福祉バスを利用し参加される老人を自宅まで迎えに行き、十時三十分、園に到着。園では、園長はじめ職員

の迎えを受けた。

この会に参加されたのが、町の独居老人五十名のうち十名程であったのが残念であった。事務局調査時では、希望者は二十名程いた。が、当日になり用事ができたり、急病になったりで前に述べた参加者に終った。

園では、寮母さんが、入所者の一日の生活を説明されたり、ビデオTVを見ながらの腰痛予防体操、入浴の見学。栄養士さんによる季節に応じた栄養と調理方法の説明を聞き、園生との会食会に移った。園職員の方々がカラオケを歌ったり踊られたりして老人達は大変喜ばれていた。

子供たちと共に 高 原 葛 原 町 方 城

社協へ勤め始め、社協のあり方、専門員としての自覚に目ざめないまま、7年目を迎えてしまった。

専門員の方々の行動力に感動し、企画の素晴しさをほめちぎり、又、個性的な人達に憧れているが、毎年同じパターンで過ぎ去っている。

自己主張の下手な私にとって最初に取り組んだ夏期学童保育の児童達との出会いが印象的であった。子供の発想や行動力に私の方が学んだ気がする。

以後、子供達と接する機会が多い為、子供達が参加出来る企画に取り組んで行こうと思う。

我町には、特別養護老人ホーム2施設、精薄更生施設、重症心身障害児施設と4施設ある。

そこで、子供と施設を結ぶものとして施設ボランティアの活動を行なっている。

中学生だけの自主的な運営が出来るように援助して行きたいし、望んでいる。

子供達との関わりを大切に、福祉の未来を考えたい。

特に九十才のおばあちゃんが大変喜ばれ「次はいっつ行ないますか」と待ちどおしくされてあったのが一番印象に残った。少人数でもこんなに喜ばれるなら次年度からは、少なくとも月一回は実施していこうと事務局で話した。

社協は地域福祉の中核体であるとしてよく言われます。しかし、私たち社協の人間として、この「地域福祉」とは一体何かという点について明確な考え方や実態を、必ずしも提起しきれていないとは言い難い面が多分にあるのではないのでしょうか。

ここ数年、行政いわゆる政策サイドでも、この「地域福祉」ということが使用されていますし、また、ボランティアや住民といういわゆる運動サイドでもしばしば使用されることばになってきています。

このようなことを考えてみると、地域福祉のとらえ方に、社協と行政と住民という3者で3様のとらえ方が行われているのではないかと思うわけです。

では、どういった地域福祉のとらえ方かというと、行政いわゆる政策サイドでは、まず第一に、「自分のことは自分でしなさい」というような「自助」と「やさしさとか思いやり」といった心情的な面に訴える「互助」といったことではないでしょうか。

そして、これにプラスした形での「有料制・応能負担」という問題があります。この有料制については、私たちに身近なところでは「家庭奉仕員派遣事業」というものがあります。何故あえて問題かと言ったのは、家庭

奉仕員派遣事業はご承知のとおり、対象者の拡大をはかるため、有料制を導入したわけですが、これはむしろ対象者のランク付けとサービスのランク付けにかなっていないのではないかと考えられます。ですから、金のあ

方が強いのではないのでしょうか。そして、これらは可能な限り、原則的に無料であるべきだということとらえ方ではないでしょうか。以上が、地域福祉を進めようとする3者3様のとらえ方だろうと思うわけです。

者の視点(実態)にたった地域づくりということが地域福祉への一歩ではないかと私は思います。いろいろ申し上げてきました。現時点でこのような意味で矛盾をはらんだ地域福祉の一つの柱である在宅福祉サービスには、いくつかのとらえ方あり、考え方があつたという現実があります。たとえば、在宅福祉サービスを施設ケアとタイジしたものと居宅保護が原則と

在宅福祉サービス

展開の前に考えたいこと

Y・M

「やさしさとか思いやり、そして助け合い」といった「互助」を中心に、プラス「自助」ではないだろうかと思えます。

そして3番目のボランティアや住民いわゆる運動サイドは、本音として、住民が日常生活を送る上で支障をきたすものや命に関わるものは、憲法に保障された生存権や幸福追求権の基本的人権として、権利として国は

生活の最低限度を保障すべきだとして「公助」を要するところであ

て問題かと言ったのは、家庭

生活の最低限度を保障すべきだとして「公助」を要するところであ

生活の最低限度を保障すべきだとして「公助」を要するところであ

員配置が非常に厳しい状況に置かれていくかわりに、行政業務や出向が進み始め、それに伴っての有形無形の事業の委託化が見られないかということ。三つ目は、各種団体の事務や係わりの問題です。これは、以前かなり強力に団体事務を整理し、切り離さなさいと言われてきましたが、最近では、下火になった感があります。その背景の一つとして、社協が在宅福祉サービスを展開する上で、これらの団体を戦力として利用するという安易さに走り始めていないかという点です。四つ目は、「まなこ」で指摘されている専門員の資質向上のための学習・研修の問題です。一つ一つの事業や活動を展開するにしても考える素材やアドバイスが、それぞれの市町村にマッチしたのものになっていないのではないかと点があります。五つ目は、事務局体制と役員

国家観の幻惑

いのちとくらし——人権——を守るために

龍谷大学助教

高石史人

近年の福祉状況をめぐって、もつとも危惧される一つの問題を、とくに戦後の福祉研究の動向にかかわるかたちで総括的に提起してみたい。

ひとやというなら、「国家悪」の問題がいつの間にか風化、脱落してきて、これにいかにも無防備な状況が着実につくられてつある、ということである。

「国家」の本質が物理的強制力を伴った国民の支配・収奪の機能であることは、歴史的近代の形成以来、いわばひとつの「必要悪」というかたちでの自明の認識であった。国家の本質が悪であるという認識は、一部保守主義者や国家主義者の方が明確に認めているところであって、力には力で対峙するという軍事均衡論（平和論）の出自も実はそのような国家観に依拠している。

他方、またいわゆる古典的な「階級国家観」も資本主義国家において、経済的生産力がブルジョア階級の手握られている以上、それはブルジョア階級に奉仕する道具に他ならないとす

る別種の国家悪観をもつて国家の廃絶を唱道した。ところが「民主主義国家」というそれ自体自己矛盾をはらんだ体制の出現以降、国家認識は一転して甘くなる。すべての国民の生存権を保証する国家」というものが、そもそも成立しうるものかどうか、またその際の保証の内実についての警戒心を徐々に薄れさせてしまったところに、国家を国民の諸利害を調整し、かつ公共の利益を推進するために国民全体に奉仕する機関であると考えられる「福祉国家観」が重ね合わせられてきた。

福祉研究者の間でまだ「階級国家観」が優勢であった頃、これを「国民のいのちとくらしを守る」国家（行政機構）へと転換せしめていく媒介の論理として「運動論」がもてはやされた時期があった。私見を交えてい

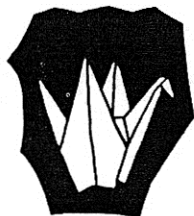
えば、たまたま高度成長の時流が運動論の有効性を保証したかに見受けられただけで、いわば階級国家観と福祉国家観の国家認識の本質的相違を表面弥縫してみせにすぎない。国家の財

政危機が叫ばれるや運動論は色褪せたものになった。国家認識をただ不透明にしただけである。以降、階級国家観も福祉国家観も後退し、国家主導の行革状況のなか、これに便乗する国家悪に不感症となった現実主義的言説のみが横行しているようにみえる。

とりわけ気になるのは、国民の自助努力とボランティアの誘導的回路での動員を、行政主導的に唱道する民主主義者と思しき人びとの議論である。自助と連帯の出自は、本来「必要悪」としての国家の肥大、干渉を防御する市民（個人）の側の論理であった。まさしく逆の回路で主唱されており、それは新たな国家主義的思考の承譜に属する。他方、行政主導型もしくは半官半民型自助・地域福祉推進路線は、国家（行政）責任を回避させようとするものだとする議論がある。状況論として即目的には正しいと思う。しかしその国家悪への認識の稀薄さは危険であるとも思う。

国家が（行政機構を通して）その国民に利益をふりまくとき、必ずやそれに見合う別種の収奪（国家への従属）を要請する。わが国の戦後の政治過程を少し

注意深くたどれば、国民の食らうことの増量とひきかえに、国家がその精神収奪を企画してきたことは、例えば靖国情況の推移等を考察すれば自ら明らかである。低成長期以降、国家はその利益誘導路線をも変更し、危機の政治技法——現代版「欲しがりません勝つまでは」——をもって、新中間・飽食大衆の精神の国家管理化を強めてきている。ものとり主義とも、国家主導型地域福祉路線とも訣別すべきときがきているように思われる。国家悪を見すえた、本来的な意味での自立と連帯の創出（小国寡民＝自律的社会）が、福祉の世界にもいま切実に求められているように思う。社協の役割はそこにごさめるのではないだろうか。



「ガンバツテ」ます

各ブロック活動から

福岡ブロック

会長 内野 英雄

福岡地区専門員連絡会は、今年度は「調査」を研修テーマとしました。

五月三十日、県社協にて、地域課諸藤指導員を招き「地域福祉における調査の意義」ということで、第一回研修会を開きました。「調査なくして活動なし」という社協活動の大原則も、日々のサービスマン業務・雑務に追われ、きちんとした調査を実施する社協が、年々減少しているように思われます。社協マンとして、もう一度「調査」の意義の再確認をし、調査技術の取得に努める必要があると思います。

第二回目以降も、「調査」について研修を進め、具体的な調査票の作り方等を行う予定でしたが「諸事情」と、会長である私の能力不足で今だ実現していません。さて、第二回研修会は、「筑紫

野市社協活動に学ぶ」をテーマに、一月三十日に行ないました。この研修会は、ブロック内の各社協がもちまわりで例年行うものですが、地元社協の活動診断を主な目的としています。

会員制や地域福祉大学等による、C・O活動や、「サルビア学園」に見られるような、具体的な在宅福祉サービスの提供等について、参加者から活発な質問と意見が出されました。

第三回研修会は、三月に宗像市で行う予定ですが、できるでしょうか。

以上が今年度の福岡ブロックの研修状況の概略です。さて、最近思うことですが、「いじめ」による自殺が大きな社会問題となっている。

なぜ、子供達は死に急ぐのだろうか——。「いじめ」が子供の危機への耐性の限界を上回り、現に行なわれている事実が一方ではあるのだが、危機に対する子供の耐性が脆弱化しているのではないだろうか。家庭、とり

わけ若い母親の在り方が、非常に気になるし、この部分が福祉教育の新しい分野として、眼を向けなければならないと思う。

両筑ブロック

会長 北原 暁

両筑地区では専門員連絡会が中心となり、全職員の懇親、激励、研修を目的として合同研修会を毎年一回催して来たが、第五回目を昨年十二月十四日土曜日、新装なった夜須町社会福祉センターに於て開催した。

専任局長、専門員、事務職員家庭奉仕員総勢三十四名、県から係長ほか二名出席、地元社協会長のあいさつに続き

○社協の経理（複式簿記）について

○社協活動の強化、財源について

○在宅福祉活動の現況報告

等市町村別に熱心に討議し、終了の後恒例の懇親会に移った。田主丸、三輪、夜須から艶や

かな舞が披露され各市町村からは、うぐいすの如き美声、プロにも優るとも劣らない調子の演歌等が出て楽しく、心ほぐれる一ときを過し、かねての多忙な仕事のうさを吹き払った。

筑後ブロック

会長 中山 陽一

在宅福祉サービスが命題となつてきている今日、はたして社協は、このことをどう補え

展開しようとするのか——。

筑後ブロックでは、昨年六月から、この問題を捕え続けています。そこであがつてきたことは、

①在宅福祉サービスといわれても現在の仕事で手いっぱい②サービスのあり方を考えた時簡単に飛びつけないということでした。

筑後では、このことを踏まえ①社協活動の点検・検討。②在宅福祉展開方法についての検討を進めていくことにしています。

編集後記

「こ」ではないと思いますが、初めて編集を担当したものですのでごかんべんの程よろしくお願ひいたします。

六十年四月より、編集委員になされ六月五日の編集委員会に初めて出席しました。出席されてある方々の顔ぶれを見、福祉活動について経験豊かな方ばかりで自分のような者がはたしてやっ

ていけるのかどうか不安でした。編集委員会では話の結果、各号ごとに各ブロック担当で編集をしていくようになり、ジャンケンの結果、両筑ブロックが第二三

号を担当するようになりました。浮羽町専門員宮崎君と知恵をしばり編集いたしました。原稿の提出が少なかったこともあり決して満足できる「まな

（北野町専門員 野瀬）
今まで「まなこ」そのものに傍観の立場でながめていたものが突如編集委員の一人として、「カツヤク？」することになりました。こうして専門員の皆さんから寄せられた記事に接すると、それぞれの「思い」が伝わって、感動し、自分の拙さに恥じることばかりです。

なにかしら編集に参加することだけで、専門書を読むより大きなものを得るような気がしています。
（浮羽町専門員 宮崎）